

乙 貞

第132号 通巻23巻 第5号

2004年1月10日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

Tel・Fax 077-585-4397

〒 524-0212

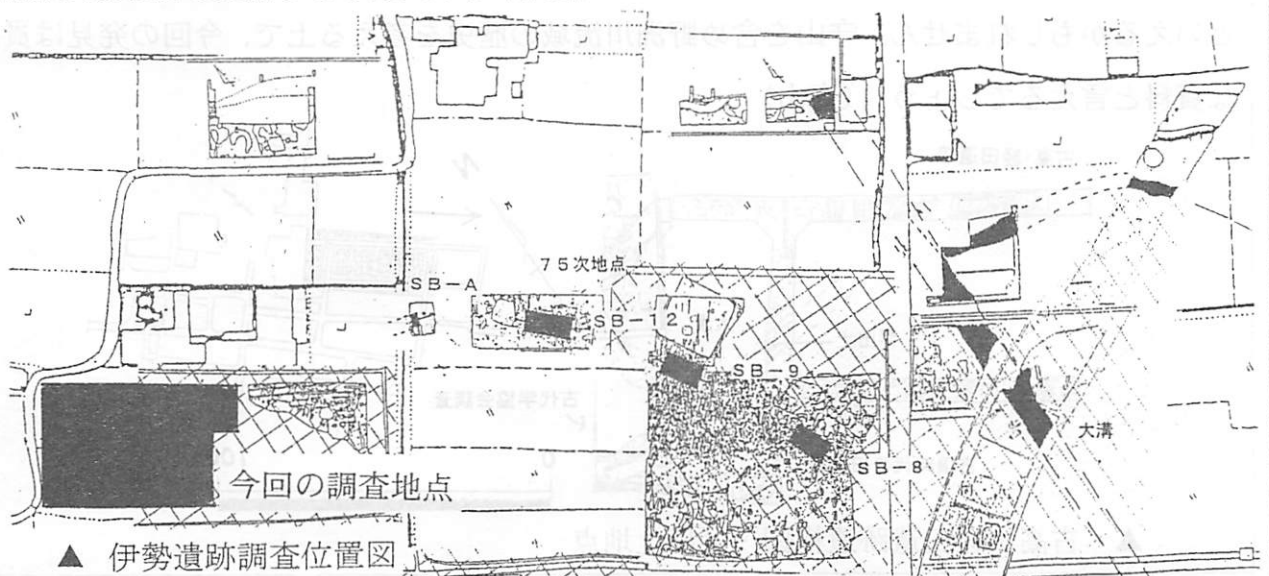
守山市服部町2250番地

新しい年が始まりました。乙貞では本年も発掘調査の最新の調査成果を中心に、お伝えしていきたいと思えます。

1、伊勢遺跡の確認調査（92次）

昨年、11月末から伊勢町地先で確認調査を開始しました。場所は伊勢町の神社（日吉神社・皇太神宮）の東側の水田地にあたります。一昨年、昨年と阿村町で確認調査を行ってきましたが、その調査で独立棟持柱付き大型建物が、弧状に配置されていることがわかりました。今回の調査地はその続きにあたり、どのような遺構が検出されるのか期待される地点です。

調査地では、鎌倉時代の柱穴や近世の耕作痕など上層の遺構と、弥生時代後期の落ち込みや、竪穴住居を確認しています。竪穴住居は一辺約4.2mを測る方形住居で、周壁溝が検出されていることから、かなり削平されていることが推測されます。また、南北方向に伸びる大きな落ち込みが検出されています。幅6m以上、深さ1mほどの溝状の落ち込みで、底には幅60cm、深さ30cmの溝が掘られていました。南側に向かって浅くなることから、今回の調査地点近くで終わるものと見られます。同様な遺構が100m程北側でも検出されていることから、南北方向に伸びる区画溝ではないかと考えています。今回の確認調査は2月末まで実施する予定です。（伴野）



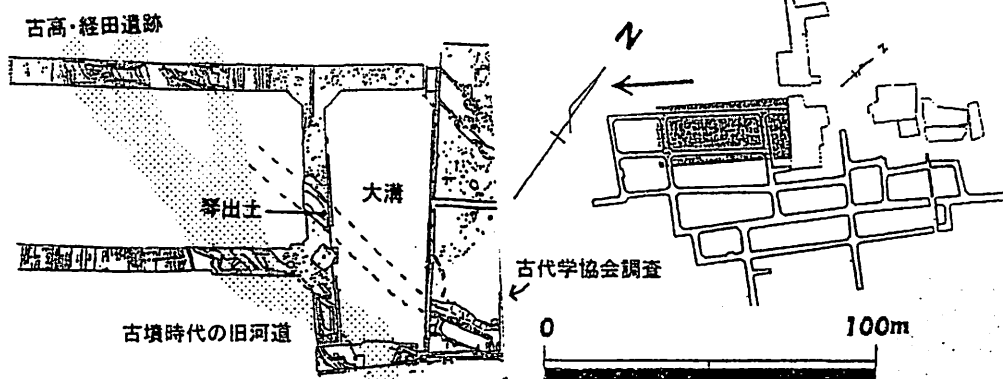
2、古高・経田遺跡の調査成果

区画整理事業に伴う古高・経田遺跡の調査は、11月上旬に終了しました。調査終盤、古墳時代前期末の大溝から、木製の琴が出土しましたので報告します。

琴が出土した場所は、幅約6m、深さ約2mを測る古墳時代前期の大溝です。今回の調査によって、溝が東から西に向かって弧状に伸びていることが確認されました。この大溝は弥生時代後期末に埋没した後、古墳時代前期に再び掘削されていたことがわかりました。大溝の周辺には古墳時代前期の竪穴住居が5棟以上見つかっていて、居住地として利用されていたとみられます。琴は再掘削された溝底に、5～6点の高杯とともに出土しました。この近くで祭りが行われた後、土器とともに琴が^{はいき}廃棄されたと推測されます。

今回見つかった琴は、市内の服部遺跡や下長遺跡などで出土している槽づくりの琴と形が異なり、棒状の形をしています。棒づくりの琴、または中国の楽器の「筑」に似ていることから筑状弦楽器とも呼ばれています。この琴は、床の上や膝の上に置いて演奏したのではなく、突起部のない細い方を片手で握り、片方の手で弦を弾いて音を鳴らしたと考えられます。形や使用方法からすると、現代の琴よりも琵琶やギターのような楽器に近いかもしれません。この棒づくりの琴は守山では初例ですが、全国で17例、県内では3例見つっています。しかし、琴糸を巻きつけた棒が^{しゅうげんこう}集弦孔に完全な状態で残っていることや、5つの突起部を含めて完形である点では全国的にも数少ないものです。

琴は全国で約50例の出土報告があります。しかし、登呂遺跡で有名な静岡県では十数例、野洲川流域では11例目と地域的に集中する傾向があります。琴を製作する技術や演奏についての知識をもつ人がこの地域にいて、祭りの際に琴を使用する習慣のあった地域といえるかもしれません。守山を含め野洲川流域の歴史を考える上で、今回の発見は貴重な資料と言えるでしょう。(森山)

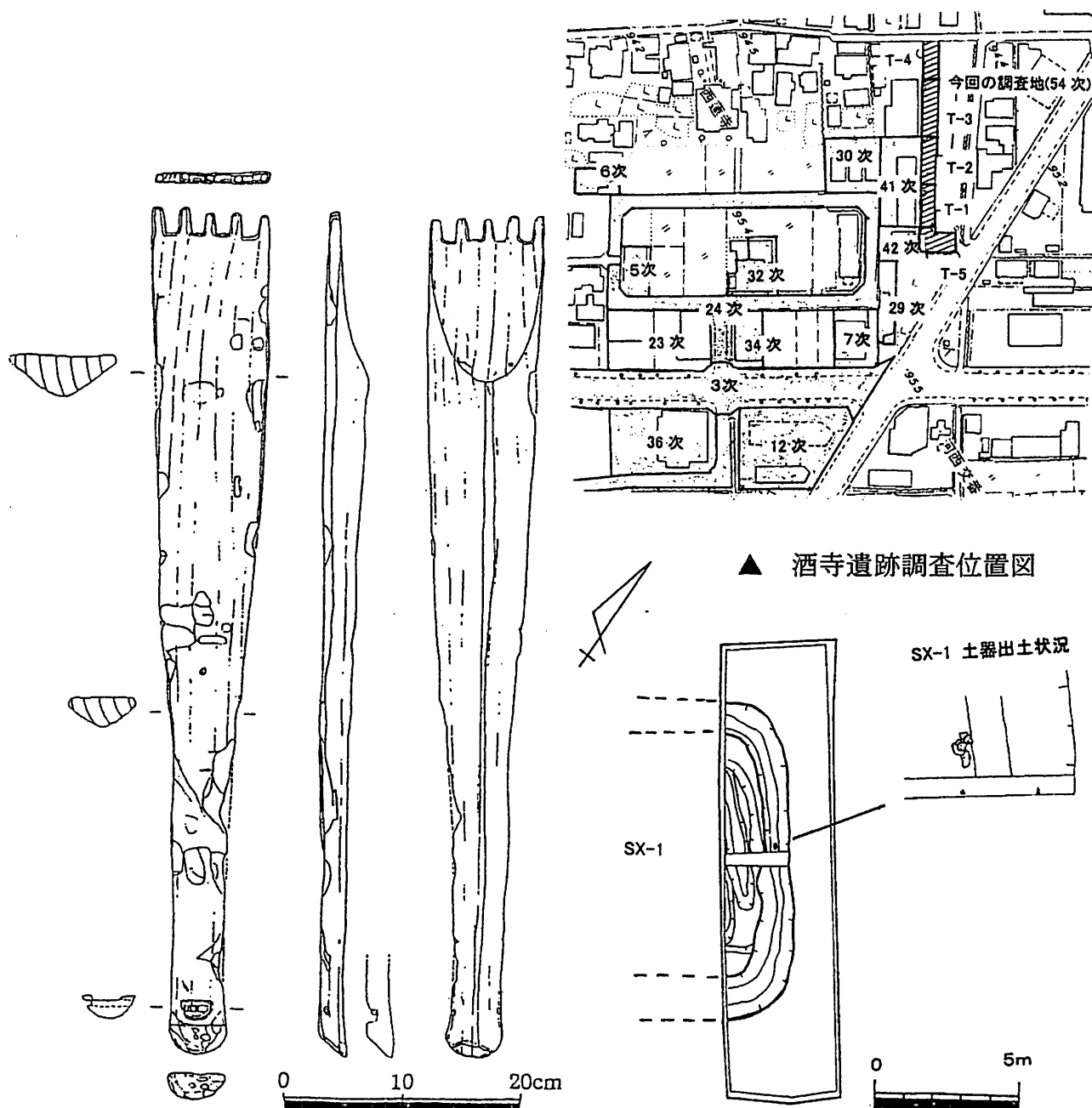


▲ 古高・経田遺跡遺構図・琴出土地点

3、酒寺遺跡の調査

昨年、11月末から播磨田町地先で、宅地造成に先立ち道路部分の発掘調査を実施しています。T-1では古墳時代前期の方形周溝墓(SX-1)の一部を検出しました。周溝墓の一边は約11mあります。溝幅は約1.7m、深さ約0.5mを測り、浅いU字状の断面形をしています。溝底から鉢が出土していて、供献土器とみられます。墳丘内では溝状の土抗を一部検出しました。断面観察から、方形周溝墓以前に造営されていた遺構と考えられます。

酒寺遺跡では 弥生時代中期から古墳時代の墓域が広がっていて、今回検出した方形周溝墓もその一部と見られます。1月下旬まで調査を行う予定ですので、新たな墓が検出されるものと期待しています。(森山)



▲ 古高・経田遺跡出土琴実測図

▲ 酒寺遺跡方形周溝墓平面図

4. 金森東遺跡(第30次)の調査

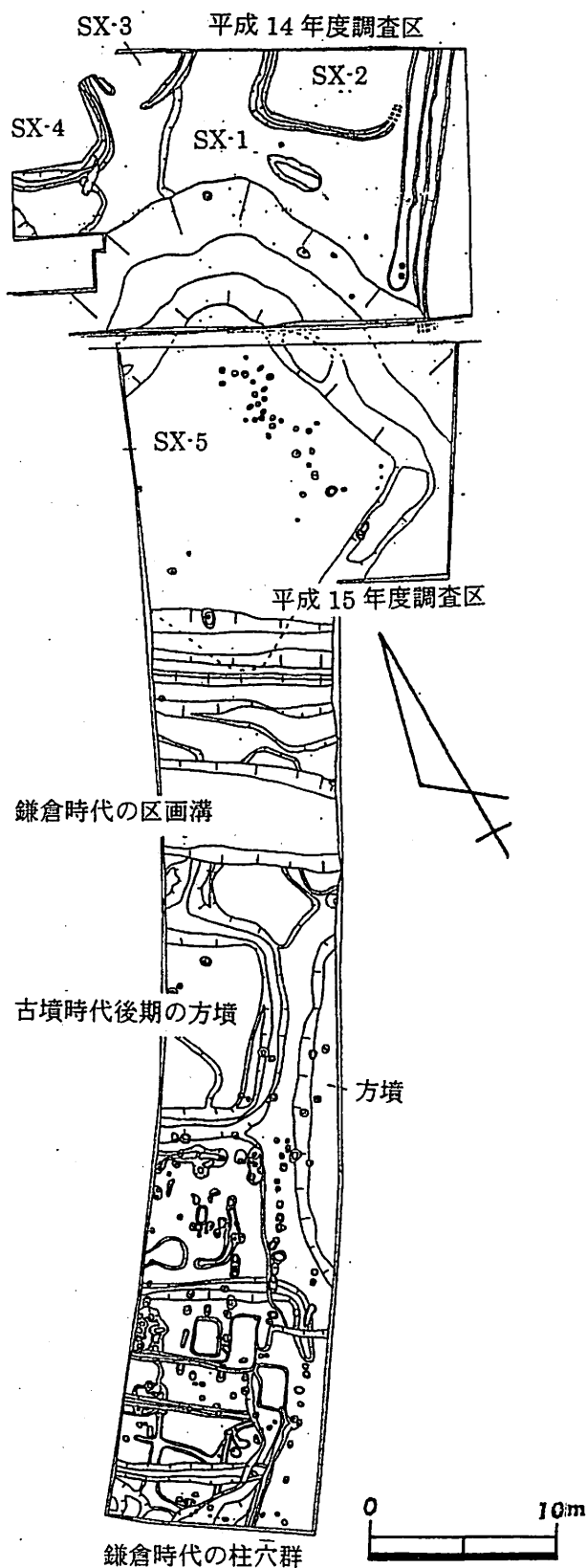
区画整理事業に伴い、年末に調整池部分について調査を行いました。

その結果、調査区北側において弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓が検出されました。平成14年度の調査でも方形周溝墓が検出されていて、合計5基となります。小規模ではありますが墓域が形成されていたことが伺えます。その中でもSX-5は一辺約13m、周濠幅は6m以上もある大規模なものです。

南西側では古墳時代後期の方墳が2基検出されています。周濠からは移動式のカマドが出土していて注目されます。

これらの古墳が埋まった後、中世の集落が営まれています。調査区中央では方形周溝墓を切って3条の溝が掘削されていて、区画溝とみられます。内側の溝は、幅約5mもあり大きなものです。この溝の南西側には数多くの柱穴や溝、土坑などが検出されています。鎌倉時代の屋敷地が、この場所に営まれていたことが推測されます。

弥生時代後期から古墳時代にかけては墓域として、鎌倉時代には屋敷地として使用されていたことがわかります。(大岡)



▲ 金森東遺跡調査平面図

【編集後記】 師走もあわただしく過ごし、いつの間にか新年を迎えました。年度末もこのように過ごすのでしょうか。しかし、今年は何が発掘されるのかと期待しています。【BK】